

## 7 月第 4 週の礼拝説教

■日 時：2023 年 7 月 23 日（日）10：30－11：30 聖霊降臨節第 9 主日

■説 教： 保科けい子 牧師

■説教題：「 受けるよりは与えるほうが 」

■聖 書：使徒言行録 20 章 25～35 節（新約 p254～255）

■讃美歌：4 「 世のあるかぎりの」  
520 「 真実に清く生きたい、」

先週は猛暑日が続きました。庭の草木にも普段は思い出したように玄関周辺だけ水やりをしている程度でしたが、先週は 2 日おきに 3 回、夕方になってから水やりをしました。金曜日にはわか雨の予報が出ていたので、ぎりぎりまで様子見をしていましたが、立川は雲が避けて行ってしまったと思い、あきらめて少し広範囲に水やりをしました。ところが夜になってかなり強い雨になりました。植物にとっては、まさに渴きをいやす命の水になったことでしょう。そして、昨日の土曜日、関東甲信越地方と東北地方の梅雨明けが宣言され、また猛暑日が続くようです。そのような中でも、主日礼拝はいつも通りにご一緒にささげてまいりたいと思います。

ところで、週報でお知らせしていますが、7 月は使徒言行録を取り上げて、主イエス・キリストが聖霊を送って形づくられた初代教会がどのような働きをしていたか、そこに集っていたキリストを信ずる群れは、どのような信仰によって歩み続けていたのかを確認しています。なぜなら、私たちは今、立川教会で週の初めに日に共に集い礼拝をささげていますが、その元の形が使徒言行録には記されているので、それを知ることによって私たちの信仰も新しく整えられていくと思うからです。そして、本日はキリスト者として歩んでいるほとんどの方が見聞きしたことのある「受けるよりは与える方が幸いである」という御言葉を中心に考えていきたいと思います。ある方は、この御言葉について次のように記しています。「確かに『受けるよりは与える方が幸いである』との教えは単純明快です。しかし、私たちはこの御言葉を素直に納得し、受け入れることができるでしょうか。正直なところこれとは反対に「与えるよりは受ける方が幸いである」と思っていることの方が多いのではないのでしょうか。それは生まれながらに人間の本性が持っている自己中心的な傾向性と言ってもよいのかもしれませんが。それだけに『受けるよりは与える方が幸いである』ということを誰よりも真実に生き且つ貫いた主イエスは、この御言葉を私たち一人一人が心に留めるべき大切な教えとして残して下さったに違いないのです。」

そのように、この御言葉は多くの人々になんとなく覚えられています。しかし、聖書

のどこに書かれているかと問われると、福音書の中に主イエスの言葉として書かれているのではないかと、という程度にしか答えられない御言葉でもあるのです。ところが、四つの福音書を開いてみても、どこにもこの言葉は記されていません。しかし、使徒パウロがここで語っているように、主イエスのお言葉として、また主イエスの教えの要約でもあるかのようにして、教会が受け継いできた大切な言葉です。それゆえに、多くのキリスト者の心の中にまるで人生訓のようにして、いつの間にか刻み付けられているのだと思います。本日の聖書箇所は、使徒言行録 20 章 17 節から始まる使徒パウロからのエフェソ教会の長老たちへの別れの言葉の後半になります。いわば信仰を持っている者たちに対して語られた訣別説教と言われています。その締めくくりの言葉が「受けるよりは与える方が幸いである」という御言葉なのです。

25 節でパウロは、「そして今、あなたがたが皆もう二度とわたしの顔を見ることがないとわたしには分かっています。」と言います。パウロはこれまでの三年間、エフェソに滞在し力を尽くして伝道し続けてきました。だからこそ、26,27 節で「だから、特に今日はっきり言います。だれの血についても、わたしには責任がありません。27 わたしは、神の御計画をすべて、ひるむことなくあなたがたに伝えたからです。」と断言できるのです。そして、その断言は 32 節の「そして今、神とその恵みの言葉とにあなたがたをゆだねます。この言葉は、あなたがたを造り上げ、聖なる者とされたすべての人々と共に恵みを受け継がせることができるのです」という強い確信へとつながっていくのです。その間で、パウロが去った後の厳しい闘いのことが語られています。教会の外からだけでなく、内からも厳しい闘いが起こるとはっきりと指摘されています。けれども、どのような場合でも、教会はどうしたらよいのか、さらには主イエス・キリストを信じて集っている一人一人が何をすればよいのかは明らかです。

「だから、わたしが三年間、あなたがた一人一人に夜も昼も涙を流して教えてきたことを思い起こして、目を覚ましていなさい。」とパウロは励まします。パウロが語ってきたことは、信仰の原点です。キリストへの信仰から離れてしまいそうになる時、いつでも原点を思い起こし原点に立ち返るようにと奨められているのです。「目を覚ましていなさい。」という命令形で記されている言葉は、新約聖書の他の箇所でも用いられています。主イエスを信じる者たちの日々の在り方は、この一言で示されているといっても過言ではないと思います。しかし、私などはいつも惰眠をむさぼっているような歩みしかできません。だからこそ、パウロが 32 節で「そして今、神とその恵みの言葉とにあなたがたをゆだねます。この言葉は、あなたがたを造り上げ、聖なる者とされたすべての人々と共に恵みを受け継がせることができるのです。」と、眼前にいるエフェソ教会の長老たちを励ましている言葉に慰められるのです。それは彼らのためにいつも祈り続けているというパウロの心からの別れの言葉でもあった、と私は受け止めています。

す。

私と夫は、これまで六つの教会での別れを経験してきました。どの教会の最後の説教であっても、夫はこの「ミレトの別れ」と呼ばれる聖書箇所を取り上げて説教してきました。それは、それぞれの教会で、共に恵みの言葉に与かり共にキリストの教会の一員として造り上げられてきたことへの感謝と、「ゆだねる」という言葉に含まれている主なる神様への絶対的な信頼を互いに持ちつつ祈り続けることを約束することでもありました。そういう意味では、牧師と教会の方々とのあるべき姿を示している箇所であるということもできます。

そして、パウロのこの訣別説教の締めくくりとして、「受けるよりは与える方が幸いである」との主イエスご自身がお語りになったとパウロが語る言葉が出てくるのです。四つの福音書にも同じ言葉が見当たらないと最初のほうで申し上げましたが、あえて似ている御言葉をあげれば、使徒言行録と同じ著者の記しているルカによる福音書6章31節です。「人にしてもらいたいと思うことを、人にもしなさい。」主イエスのお語りになったこの言葉は、「黄金律」とも呼ばれています。私たちの身近な言葉で置き換えて考えるとすれば、自分が受けたいと思うことを人にも与えなさい、ということになるでしょう。私たち自身では、とてもそのようなことはできない、しかし、私たちには先だって十字架の道を歩んでお手本を示してくださった主イエスが与えられています。言い換えればすでに多くの恵みを受けているのです。だからこそ、「受けるよりは与える方が幸いである」という御言葉に少しでも近づけるように、主イエスを見上げて歩みなさいといつも励まされているのです。